平成12年度
ヌエック(国立女性教育会館)公開シンポジウム

シンポジウム
「少子化社会の子育てのゆくえ—広がる子育てサークル」

日　時	平成13年2月25日(日)	
会　場	セシオン杉並3F　集会室(東京都杉並区)	
コーディネーター	結城　恵	群馬大学助教授
講　師	汐見　稔幸	東京大学助教授
	田嶋　昭子	中野区役所女性・青少年課
	鈴木　玲子	育自ネットワーク・ 彩の国さいたま子育てネットワーク
主　催	国立女性教育会館(NWEC)・東京都教育委員会	

○**結城恵（コーディネーター・群馬大学助教授）**：この国立女性教育会館のプロジェクトの中では、子育てサークルに大変強い関心を持ちながら、2年あまりにわたって子育てサークルのフィールド調査をしてきました。その中で、地域の子育て支援の環境づくりをしていくにはいろいろな支援のあり方があるだろうと私たちは考えました。

子育てサークルには主に2つの極があると思われました。1つは民間主導の子育てサークルで、例えば専業主婦がもっとこういう仲間が増えたらいいなと、子育てを対象にしたサークル活動をやってみようという人たちの集まりです。もう1つの極は行政主導のサークル活動の支援です。少子化対策として子育てサークルづくりを後押しする地方自治体がたくさん出てきた中で、子育てサークルの基礎が築かれ、いろいろな活動が生まれてきています。

私たちは両方の極の特徴を理解するために、それぞれフィールドワークをしていったのですが、フィールドワークを重ねていけばいくほど、行政はどこまで子育てサークル活動を支援していったらいいのかという大きな問題につきあたりました。先程のアンケート調査では、行政支援に対する満足度が必ずしも高くはないという結果も出てきました。実際に聞き取り調査の中でも、行政支援が入ることで親の自主的なサークルの活力がそがれるといったこともありましたし、逆に行政が一生懸命やればやるほど、一瞬はそういう民間の力が育つものの、ある程度までいくとその活動をより活性化させることには限界を感じるという声が聞こえてきました。

そこで、子育てサークル活動がより活性化するような行政支援のあり方とはどのようなものなのか。つまり、行政支援のあり方と民間から自主的に発生している子育てサークル活動。その協力関係、均衡関係を築いていくにはどうしていけばいいのかということを、今回のシンポジウムのテーマに据えたいと思い、今日は3人の先生方にお集まりいただきました。

まず鈴木玲子さんです。鈴木さんは埼玉県上尾市にあります育自ネットワーク代表であり、またその活動をより広く展開されまして、彩の国さいたま子育てネットワークの副代表、事務局長も務めていらっしゃいます。一人の専業主婦として3人の子どもたちを育てながらいろいろな力を結集してネットワークを築いていかれた中では、いろいろな行政とのかかわりもあったようです。今日はそのあたりのお話もいろいろ伺いたいと思います。

次に、中野区役所女性・青少年課子ども施策係の田嶋昭子さんです。中野区では8年間毎年、子育てサークル支援事業としてリーダー育成をされてきました。そこでは、地域にいらっしゃるお母さん方がサークルをつくろうと声掛けをする方になるようなプログラムを運営実施しておられます。そういう部分でもいろいろなご苦労があったかと思いますので、お話を伺いたいと思います。

最後に、東京大学助教授の汐見先生です。汐見先生も自治体と現場の育児サークルの活動についていろいろとご研究され、実際にそういう活動にも参加されています。お手元には本日汐見先生が日本経済新聞の家庭欄に出された記事もあるかと思いますけれども、自治体主導の育児サークルに関して少し批判的に検討もされ、また現在は男性がかかわれる子育てサークル活動についてもいろいろな指導や助言をなさっています。

今日はこの3人の先生方からいろいろなお話を伺いながら、どこまで行政が育児サークルを支援していけるのかという問題について皆さんと一緒に考えたいと思います。まず最初に3人の先生方の自己紹介と活動紹介をしていただき、次に行政と子育て中のお母さん方お父さん方との連携のあり方、どのようにくふうしていけばいいのかということについても経験をまじえてお話ししていただきます。

○**鈴木玲子（育自ネットワーク・彩の国さいたま子育てネットワーク）**：今、5年生の3番目の子どもは周りに友達がいませんでした。3人の子どもを生む人もいなかったので独りぼっちになってしまった時期があり、それで子育てサークルにかかわりだして、その後いろいろな活動にどんどん展開しています。

まず、上尾の活動の紹介をしようと思います。子育て情報誌にはお母さんたちが歩いて拾ってきたお店などのマップを載せており、これはお店でも売っています。もう1つは

ミックスジュースという劇団で、これはバンドときぐるみの舞台です。年間36回ほどの講演依頼があり、お母さんお父さんたちが自分の力を発揮できる場所としてやっています。また、お手元の資料の中にありますが、毎月「育自ネットBOX」という新聞を出し、サークルのリーダーさんにこれを取りに来ていただいたときにはいろいろなおしゃべりもして、市内でのネットワークの活動につなげています。

こういう活動を子ども連れでするにはどうしても保育部門が必要で、自分たちの中で有償で賄っています。また子育ての悩みというところでは、助産婦さんたちの知識とお母さんたちの悩みを交換するマタニティサロン、深い悩みを話せる子育てサロン、手遊びや外での遊びを助ける中で軽いおしゃべりをするようなサロンも持っています。

上尾の活動として95年の6月にネットワークを立ち上げたときには、生涯学習課から助成金をいただいて、最初にお見せした本を出版しました。今年度からは児童福祉課からの助成金で活動しています。基本的には1500円の会費で、自分たちに必要なものがあるというところから立ち上がったということです。

さらに、上尾のメンバーの中には、上尾の町だけではなくてもっと何か声を上げていきたいという思いがありました。99年1月、県のシンポジウムの中で県内の同じような活動をしている方たちに声をかけて交流会を行い、その年の10月に「彩の国さいたま子育てネットワーク(彩の子ネット)」という県域のネットワークを立ち上げようということを皆で合意したのです。「彩の子ネット」はピラミッド型の組織ではなく、みんなが横並びで点在している中でネットワークとして発信していけたらと思っています。今、代表2人のうち1人は男性です。

「彩の子ネット」立ち上げには、お手元の「3801人の子育て『実感』アンケート」という調査を行いました。これはフェミニストアクションリサーチという手法で、設問を作るところから自分たちで考えて、そのアンケートをとることもネットワークの一つと考えました。アンケートからみんなが心の中に思っていることを考えて、さらにつながっていく。問題意識を高めたり、どういうものが自分たちの中にあるのかを確かめたり、それを大勢のメンバーと共有していく。学びの場、おしゃべりする場を持って、より心の中の深いところにある問題に気がつくと、そういうところにつながっています。

「3801人の子育て『実感』アンケート」の中からいくつかお話しします。

「国や世の中が子育てを応援していると実感できない」が77.7%出てきました。こんなに子育てが支援されている感じなのに、なぜか「実感できない」がこんなに出てきています。また、一番役に立つのは「お母さんたちが作ったもの」であるという結果が出ています。さらに、子育て支援のための場所づくりに参加したいという意見もたくさん出てきました。

次に、「子育て状況支援俯瞰図」で、実際はだれに支えられたと思ったかを聞きました。専業主婦と職能主婦に分けてありますが、専業主婦は悲しいことに「自分自身に支えられたと思った」が「自分自身に支えられたいと思っていた」という数から大変目減りしています。有職の主婦の方が自分自身で頑張れたというところがあります。

「妊娠したことによってあなたが変化したこと」「出産したことによってあなたが変化したこと」という設問では、「妊娠して変化したこと」として一番多かったのは「夫に比べ自分の生活が大きく変わった」ということです。右側の○と×はそれが肯定的なことかどうかということですけれども、○と×が点在して上から下まで入っています。一方、「出産したことによって変化したこと」は、「とても大切なものを授かった」などの肯定的なものが表の上の方に浮かび上がり、「好きなことができなくなった」「仕事を辞めた」「社会に取り残された気がした」など下の方には×ばかりが並んでいます。私たちが自分で設問を考えましたので、一人の人の気持ちの中がこうなのだということをあとから思いました。赤ちゃんを授かってすごくうれしい、けれども取り残されている感じを内在し、解決されないままここにあるのだということです。

「彩の子ネット」では、このような実感を自分たちで調査するフェミニストアクションリサーチの手法で社会に発信していくということを考えて立ち上がってきました。

今年は、社会福祉医療事業団から子ども虐待防止キャンペーンの助成金を受けて、子育てサロンを各地で開いています。子どもとの関係の裏にはパートナーとの関係があるということ、ドメスティックバイオレンスだったり、成人男性中心の社会だということ、問題は場所がないことで、専業主婦たちには場所を借りるお金もないし伝える術もなかったのだということ等、やっていくうちにいろいろと気がついてきます。

そして、3月に行う県のイベント「子ども夢未来フェスティバル」の共催です。この中で不登校の問題などに取り組むうちに、子育ては小さい子どものときだけではない、今は大丈夫だからなどと言っていられないということに気がつきました。自分が我慢すればとか、自分はいい方だからと

か、自分さえよければなどと言っていると、やはり本質ではなくて程度の問題なのかというところを感じています。

○結城：一人の主婦がどのようにしてこういう活動を立ち上げたのか、それがなぜ必要だったのか、いつも疑問に思っていたのです。今のお話で、個と個をつなぐネットワークとしてのサークル活動が情報誌というかたちで実現し、ミュージカルの活動は自己実現の場としても機能しているということがわかりました。またアンケート調査や「子ども夢未来フェスティバル」は、子育てにかかわる中で感じている問題を掘り下げながら問題意識を高めて、社会に発信していこうという活動に広がっているということです。

田嶋さんは「中野区おひさまCoCo」という活動で子育てリーダーを育成されてきましたが、なぜ子育てリーダー育成をしてきたのか、そのプログラムの概要、その成果等を伺ってみたいと思います。

○田嶋昭子（中野区役所女性・青少年課）：子育て仲間づくり支援事業には長い歴史があります。中野は人口密度が非常に高く、乳幼児のいる家庭の転入や転出も多い場所だということを念頭に置いていただき、まず在宅乳幼児親子事業をご紹介します。

1954年に巡回保育事業が始まりました。これはまだ保育所や幼稚園が少ないときに、職員がリヤカーや自転車に遊具を載せて公園まで出向いて保育をしたというユニークな事業です。1966年に区立児童館が初めて開館しました。中野の場合には1小学校区1児童館という構想があり、現在小学校数が29校、児童館が28館建っております。

1989年に巡回保育事業は巡回児童館に改称し、このころには児童館の数が増えてきたということで14公園に縮小されました。少子化・核家族化が進み、親の養育力の低下が社会現象としていわれていた時期に、行政が事業の中で子育て支援をしていったということです。

1992年には、子育て仲間づくり支援事業の前身である子育て仲間づくりリーダー養成事業が始まりました。これは地域の子育てを援助・支援することを目的としたものです。この当時リーダーという名称を使っていますが、特別な人を育てている事業ではないということから、昨年からはこの名称をはずしました。

1995年には巡回児童館が児童館にすべて統合され、出前の事業というものがなくなりました。

現在の中野区の子育て支援の考え方ですが、平成11（1999）年の2月に「なかの子どもプラン（地方版のエンゼルプラン）」が策定されています。その中からピックアップしましたものが次の4点です。

- 地域の中で取り組む。
- 子育て（周りの大人が育てる）だけではなくて、子育ち（子どもが自分で育つ）を重視する。
- 子育てをしている人たちが動きやすくなるような条件整備や支援の部分を行政が受け持つ。
- 自立した子育てグループには場と情報の提供を中心にし、いろいろ口出しをしない。

子育て仲間づくり支援事業の目的です。この事業を知って参加していただくためのチラシでは、子育て中の親が、初めの一歩を踏み出すために、「この講座に参加してみませんか」と呼びかけ、最初の問題意識やエネルギーを引き出すための条件整備を行政が行うのだと明記しています。当初、巡回事業の中でリーダー養成事業が始まったのは、巡回事業がなくなったときに地域に核となる人がいてくれればという目的であったと聞いています。現在では児童館が受け皿になり、日常的に来館できて仲間づくりができるわけですが、子育て中の親子が仲間づくりをするためにだれかが声掛けをすればいいのではないか、そういう方たちを育てるための事業です。

主なプログラムとしては、1グループワーク、2実技講座、3参加体験、4自主企画講座という4つの柱があります。5回あるグループワークでは、ゲームや話し合いなどをとおして自分に気付き、コミュニケーションをとる方法を身につけます。実技講座ではパネルシアターや絵本の読み聞かせなど、地域にかえって何か活動をするときに使えるものを学んでいただきます。次に参加体験というのは、児童館で実技をしていただくということです。そして最後に、企画から当日の準備まですべてを自分たちで実施するのが自主企

画です。また、これらのプログラムには一時保育をつけています。お母さんたちにはこの一時保育があるということが参加のきっかけにもなりますし、子どもから一瞬解放されて自分が勉強してみたいということで、この一時保育がついているということは好評です。

仲間づくりの核になる方を育てるという目的が果たせたのは、講師によるところが大きいと思います。3期から8期までの6年間お呼びしている先生はとてもエネルギッシュな方で、その人柄に引かれてCoCoさん（この授業の修了生）たちが力をつけたというところもあるようです。

1期から8期までで229名のCoCoさんが卒業しています。修了後、はじめは各児童館に戻って乳幼児親子事業の核となり、さらに幼稚園や学校のPTA、児童館の運営委員になりと、地域の幅広いところで活躍をしています。

ただ、デメリットも若干見えてきました。中央での集中講座ということで区民全体の中からすると本当にわずかな人数であるということ。各児童館、地域に戻ったときにも、どうしても講座で得た仲間づくりの方に気持ちがいってしまうといったことです。今年は全面的に児童館がかかわり、定員を30人から60人まで広げました。区内全域を2ブロックに分けて、先生にはあっちへ走ったりこっちへ走ったりしていただきましたが、それでも60人です。行政的にいいますと費用対効果というところでは若干難しいところがあるかと考えました。

このようにご紹介してきたCoCo事業ですけれども、今年度でこの集中講座方式をやめることが決まっています。来年からはより地域に密着する方向で、地域に28館ある児童館で受け入れをしていく準備を進めています。

○**結城**：中野区の行政支援というのは、仲間づくりの核になる人たちを育てたいということで、そのプログラム内容を非常にくふうされています。いかに魅力ある講師を確保するか、一時保育をどう設定できるかということと同様、プログラムの内容の充実にも大変なご苦労があったかと思います。また中野区の子育て支援は、子育てグループへの援助は場と情報の提供、条件整備のところで、ある種の線引きをしながらの支援だという考え方もお話の中で浮かび上がってきたかと思います。

汐見先生は、保育所や小学校等のお父さんたちがどのように子育てサークルとかかわれるかという指導、支援をなさっています。また、子育てサークルの核になる人を育成していくにはプログラムが重要だということで、子育て支援士養成講座を立ち上げていこうとしていろいろな計画を練っています。

○**汐見稔幸（東京大学助教授）**：私が子育てサークルが大事だと思うようになったきっかけは、実は個人的な体験です。17、18年前に、現在私が住んでいる品川の八潮団地に引っ越してきました。全然つながりのない2万人近くの人たちが、いっせいに同じところに集まり生活しはじめたのです。その中で、あるお母さんが背中に子どもをおんぶしながら自分の住んでいる建物の一軒一軒を回って、一緒に子育てをしませんかと募ったところ、賛同した70人のお母さん方が一気に集まったということがありました。

その団地の真ん中にある地域センターの一角を週1回貸してもらえることになりましたが、それを聞きつけた別の建物のお母さん方も同じようなサークルをつくりはじめ、あっという間に12ものサークルできたのです。子育てサークルというものが最初にできはじめた時分だったと思います。しかし12ものサークルですから、場所確保がたいへんで、そのセンターを奪い合いをするわけです。その様子を、私は興味を持って見ていました。

私はちょうどそのとき、日本教育学会の課題研究「現代社会における発達と教育」の幼児グループの事務的な責任者をやっていました。そのころすでに活動を始めていた「あんふぁんて」の方にも協力していただき、先程アンケートをとられたようなことをこの八潮団地のグループにも一通りやってみたのです。その結果、自分の子どもがまっとうに育っているのかどうか全然わからないことが不安で、とにかく一緒にいると安心だとか、ちょっとした育児のやり方がわからなくて、グループの集まりに行くといろいろ盗み見ることができる等ということに意義を見いだしている人が多いことがわかりました。なるほど、これはこれから広げていかなければいけないのではないか、というのが私が育児サークルに関心を持ったきっかけでした。

ところが、すぐにいくつもの問題があるということがわかってきました。例えば一番最初にできたグループは70人もの親と子どもがいるわけですから、上手なサークル活動をすること自体が大変なことなのです。実施に何をしているかといえば、毎回親子がペアーで大きな輪になってテレビの「ポンキッキ」のまねごとをしているのです。要するに、何をしていいのかわからないのです。遊ばせ方もわからないし、サークルをどうまとめていけばいいかもわからない。なるほどサークルといってもそれほど簡単ではないのだということがすぐわかりました。

ただ、そういう場所には集まらず、晴れたらとにかくハイ

キングに行くというグループだけはたいへん上手にやっていました。子どもたちは毎日リュックを背負ってうれしそうに遊びに出かけるのです。ですから、リーダー格の人がどんなイメージを持っているかということで、サークルが全く違ってくる。リーダー格の人の教育のようなものが必要だなと感じたのもそのころです。

その12サークルを2、3年後にもう一度調べたら、かなりがつぶれていました。例えばリーダーの子どもが大きくなったからということで引いていくなど、継続すること自体がたいへん難しいのだなということがわかったのです。せっかくおもしろいサークルだったのが、中心メンバーがいなくなったり、内部のちょっとしたいさかいをきっかけにつぶれていくということもしょっちゅうです。サークルを維持することを自己目的にするのはまずいけれども、放っておいても簡単につぶれてしまう。これもまた考えさせられたテーマでした。

3つ目は、活動場所を確保するのが大変だということです。せっかくサークルができたのに、集まる場を確保するためにみんなが東奔西走しているというのは何か気の毒な構図です。日常的な、今でいう児童館や子育て支援センターのもう少し気楽なものがないかというのが、そのときから私の切実なテーマになりました。

それから、子育てサークルをやっている人たちを支えるネットワークが地域社会にないと、早く行き詰まるということがわかりました。例えば幼稚園に入る年齢になったからと幼稚園の情報集めをするのですが、一緒にやれば簡単にできるのに、それぞれのグループが勝手にやっているわけです。そのために同じ幼稚園について違う情報が流れて苦労したということもあったようです。また、離乳食を作る勉強会をすることになったときに、地域の保育所の栄養士に相談に行くなどと発想した人は一人もなく、瓶詰め離乳食のメーカーの担当者に来てもらっています。これでは企業の宣伝になってしまう可能性がありますが、それしか思いつかない。保育所の栄養士さんたちはそろそろ地域の育児支援もやりたいと思いはじめていたのです。そういう意味で、サークルができたとしても、それをぽつんぽつんと放っておくのではうまく機能できないということがわかりました。こうしたいくつかの教訓が17、18年前にすでにあったのです。

そのあと私は、個人的にいろいろなことで育児サークルにかかわるようになりました。例えば、横浜の子育て支援の計画づくりでは、また別の体験をしました。飛鳥田さんが市長だったとき、子育ては親が自主的に支え合ってやるべきだという哲学から、幼稚園・保育所があまりつくられませんでした。そのために横浜は人口330万人に公立の幼稚園はゼロ、公立保育所は126しかありません。ですから、働く女性にとっては必ずしも住み易い街ではなかったのです。これではまずいということに横浜市も気がついて、私たちが呼ばれて何年か議論したことがあります。

横浜には子育てサークルがたくさんあって、私はその勉強会にしょっちゅう呼ばれたのですが、そのときに来るメンバーはどこの地域でも固定していたのです。保健婦さんなどに聞くと、子どもを育てているお母さんのうち子育てサークルに来ている人のパーセントは一桁の下の方だろうということでした。つまり、子育てサークルに来られる人はそれなりの行動力や判断力のある人で、本当に困っている人はでてこないということです。子育てサークルというのは大事なのだけれども、自分でつくりなさいという論理だけだったら、現代における強者の論理になってしまう。それをどう突破していくのかというのが、次のテーマになってきました。

そこで、私は東京を拠点にしている「育児カレッジ」という育児サークルのリーダー養成のための組織に少し参加してみました。例えば、日経に書いた記事はこの育児カレッジでの体験なのです。80年代の前半には親が育児サークルをどんどんつくっていくエネルギーは十分ありましたが、90年代に入ってきてからはその感じが変わってきます。まず、母親がすごく構えてしまいますし、サークルをつくっても逆にそこでのあれこれに気を遣って、かえっていらいらして、子どもにどんどん厳しくなっていくということも出てきました。そこで、行政は育児サークルをつくりましょうと呼びかけたあと、どうフォローしていくのか。なぜいちいち苦労してサークルをつくらないと子育てができないのだろう、これはおかしいのではないか。そういうふうに問題を立てなければいけないのではないかということが、私たちの中で出てきたのです。

ちょうど1年くらい前に「プチタンファン」という育児雑誌が、育児サークルはいったい親にどう受け取られているかというアンケートをとりました。それを見ると、行政のやっているものはあまり評判がよくないのです。「かゆいところに全然手が届かない」「つくったらいいというものではない」など、こんなに厳しく見ているのかということがわかってきて、せっかく育児支援をやりはじめたのだけれどもきちんと評価されていないこともわかりました。行政側と親とのもっと本音でのコミュニケーションがないといけないようなのです。以上のような体験から、日経の「オープンな「たまり場」こそ必要」という記事が書かれました。

さらに最近では「育児支援」という考え方そのものへの疑問もでてきています。それは、行政が親の要望に応えて「これもしましょう、あれもしましょう」とやっていけば、親の育児能力そのものがうまく伸びなくなるのではないか、という疑問です。本当は親がしなければいけないことを周りが肩代わりしてしまってはまずいのではないか、ということです。確かにそういう面は否定できないと私も思っています。たとえば、児童館の職員の方が子どもとお母さんを集めて「みんな、輪になって歌を歌いましょう」とやっているような「育児支援」は、あまりうまくないと思います。これでは家に帰っても親の育児がうまくなるとは限りません。育児支援というのは親と子どもの関係が上手に作れるようになるための援助が基本で、その練習をしてもらうことが方法になるはずです。育児支援といいながら、その基本的概念が共有されていない現実があるように私は思っていますが、早急に克服されねばならないと思います。

それらのことと総合してでてくるのは、育児支援というのはきちんとした訓練を受けないでできる仕事ではないということでした。かなり深刻に悩んでいてようやく勇気を出して相談したお母さんに「お母さん、ひょっとしてテレビとかビデオを1日何時間も見せてない？」「いっぱい見せてます」「そうでしょう」などといっては、二度と相談したくなくなります。そのときには、やはり「そんなこと気にしなくていいのよ。でも、そんなことを私に相談するなんて、勇気がいったでしょう？」というような、相手の心理を十分に配慮した対応が必要です。しかしそれは、ある種の育児支援のプロとしての訓練を受けていないとなかなかできないものなのです。それで私はためしに育児支援士養成講座というものを立ち上げ、カリキュラムを模索しながらやっています。こういうものが必要になると思うのです。

もう1つ先程の続きを言いますと、育児サークルをつくったお母さん方に、何もかも全部自分たちで運営しキープしなさい、ということでは、できる人は限られてくるという問題があります。それよりも、行政の方から場をうまく提供してあげて、あるいは場探しに援助をし、そこに例えば気軽に相談に乗ってくれる人、アドバイスしてくれる人を上手に配置していくシステムづくりこそがこれから必要になるのではないか、そう思います。

サークルそのものがだめなどということでは全然ないのですけれども、それを全部自前でつくって、その内部の緊張感も自前で解決しなければいけないということではなかなか発展しないのではないかと思います。行政の課題はそういう環境づくりではないかと思っています。

○**結城**：3人の方々のお話からは、非常に重要な共通点が出てきたと思います。子育て支援の内容の吟味、親自身がやるべきこと、サークルとしてやるべきこと、行政が支援することの区別がないと、いろいろな問題も出てくるのではないかということです。

次に、子育てサークルをとおした子育て支援のあり方、行政と現場のお父さんお母さん方とがどう手を携えてやっていけばいいのか。それぞれのご経験を踏まえてお話しいただければと思います。

○**鈴木**：行政とのかかわりでは、私たちも場所がないということで児童館をつくってほしいという働きかけをし、去年の5月に初めて児童館ができました。それには私たちの声で訴えたというところが大きかったと思います。

先程も紹介したイベントを県とやる中で、ここに来ていない人に届けようという思いが私たちの中に芽生えてきました。私たちにはできるのに、ここに来られていない人には届かないという思いを持っていないと、自己満足の世界になってしまうと思います。子育てサロンを展開してる中では、とてもつらいところにいて、虐待してしまっているかもしれないというお母さんと出会いはじめています。ほとんどの母親が精神的なところでは自分の子を虐待してしまっているということもあると思いますから、その人たちと私とは全然差がないと思えないとどうにもならない、本当に一緒に考えていきたいと思うのです。

今のお母さんの中には、パートナーと一緒にやればという声掛けにも、自分でできるからという人が結構います。人とかかわると傷つくというのが、パートナーとの間でさえある。けれども不登校などの問題がこれだけあるのは、子育ての最初の時期に、そういうわけにはいかないのではないかという危機感を感じないでやっているからではないかと思います。だから、今のお母さんは何もやらないということ

ではなく、ちょっと気がついて問題意識が芽生えるかどうかなのではないか。そこからやらないと必ずどこかでつまずくのではないかという気がします。

多くの講座を受けていろいろな知識を入れてきても、それを役に立てるのは自分自身なわけです。やはり自分が何をしたいのか、自分は何だろうと見つめる作業が一番大切ではないかと思います。

○田嶋：修了されたCoCoさんたちのOB会をCOCOSといいます。資料に「COCOSの組織」とありますが、昨年3月のCOCOSの総会で、人数も多くなったことだし役割分担をしてみたらどうかという話が出たようです。みんなでやっていけばいいじゃないか、だれかが声をかけるし、だれかが何かを担えばいいじゃないかという精神がうれしいと思いました。1年たって、もう次の事務局長も決まっているそうで、着々と代替わりができているというところがとてもすばらしい組織だと思っています。

中野の場合には住民自治がとても進んでいるということでいろいろな活動がありますが、だからといって一足飛びに自主活動ができるというわけではありません。今年まではCoCoさんたちを地域で育てていたわけですけれども、そういう養成をやめて、今度は児童館という日常の中でそういう方たちを発掘し、育てていくかというのはとても荷が重いのではないかと思います。どうしても職員が前に出てしまいがちです。職員がいなくなってしまったら、そこではもう仲間づくりはできなくなってしまうのか。そうではないというところで、中野の児童館も今少し方向転換しようということです。CoCo事業を受け入れていくにあたっては、地域の方たちをどう活性化していくか、自分たちが表に出ずにどうきっかけづくりをするかといった難しい問題があり、これはまた考えていかなければいけないところです。

汐見先生の新聞記事にもあるように、最近のお母さんたちは受け身の方も多いのですが、何かやってもらうことを求めるのなら「幼児教育の講座の方に行かれたらどうですか」「児童館ではお友だちづくりができますよ」と声掛けをするのですけれども、「それでは私が求めているものと違う」という方もいらっしゃいます。これからは中野の児童館が井戸端会議の場になっていけたらいいと思いますし、そのときに職員がどういう役割をしていくのかはかなりの課題で、これからも考えていかなければならないと思っています。

○汐見：先程大急ぎで言ったので誤解を与えてしまったかもしれません。育児サークルをつくって熱心に活動をされていることが「強者の論理」ではないかと申し上げたのですけれども、やっている人がそのことを気にしすぎるのはよくないという気がします。「こういう感じでサークルをつくりたいね」となれば気の合うどうしが集まるのが自然な姿です。そこへ来ておしゃべりしたりするのが楽しいからやるのだということが第1で、プラスαいろいろ学べるということぐらい。そのことをあまり変に卑下することは全然ないのです。

ただ、行政というのはあくまでも公的な論理を大事にしなくてはいけません。そうやって一所懸命やっている人はいいけれども、そういう活動ではうまく出てこないような人たちに対してどのような子育て支援が必要なのだろうか。そう考えると、必ずしも子育てサークルをつくりましょうということだけにはならないのではないかということを申し上げただけなのです。最初にサークルをつくりましょうとやるか、まず最初に上手な子育てたまり場をうまく提供しておいて、その中でうまくいったら少しずつサークルをつくっていきましょうとやるか。それは原理的には違うと思うのです。

例えばみんなが出てくる健診のときに、そこへ来たお母さん方が「あっ、楽しそう」と思えるようなものを傍らで企画できないか。そういうかたちで、うまいたまり場のつくり方を考えられないか。そう考えると、保健センターなどの協力やネットが相当大事になってきます。本来行政のなかで親の育児支援をするのは、「母子保健」のはずです。母子保健の延長で地域の育児支援をするというかたちで財源を組めないかという提案には私も賛成で、そういう意味で保健センターなどと協力しながら、そこだったら必ず来るというお母さん方に上手にチャンスを与えていけないか考えていただきたいというのが1つです。

2つ目は、子育て支援というのは親子関係づくりへの支援が基本といいましたが、同時に親の自立への支援ということと統一していかねばならないことです。今、親はあちこちで自分探しの場を求め始めています。小学校の学級懇談会でも、教師に対して何でそんなことを相談してくるのだろうというくらい、教師に相談が出てくるといいます。人間関係の温かさややわらかさが地域から消えてきたために、何とか自分の本音を聞いてくれる人をさがし、それを信頼する先生に見つけているわけでしょう。その意味で、育児支援と育自支援を統一的に考えていかなければならない時期だと思うのです。お母さんが自分を解放できるような場をどうつくっていくかという問題を立てていかないと、親子の関係形成だけをやっていても長期的にはうまくいかないと思います。

3つ目は、お父さんをもう少し登場させようという話です。男性も育児に「参加」させようという言い方ではなくて、子どもとかかわるのはこんなにおもしろいことで、実は自分

の人生を別なかたちで充実させてくれるものだ。そういう体験をすることがパートナーとの関係もよくしていくのだ。そういうことを伝え、わかってもらいたいのです。お父さん方は普段は会社の世界で生きていますから、母親の育児とは少し違うかかわり方が可能です。幼稚園や小学校のPTAなどの中に「おやじの会」をどんどんつくっていくことで、社会のあり方を変容させられないだろうかと思っています。そこで自分と違う仕事をしてながら同じ時代を生きているおもしろいお父さんに出会い、こんなに楽しかったことは久しぶりだというような体験をすれば、お父さんはがらっと変わります。そういう場を上手につくっていくことが、育児サークルづくりと合わせてとても大事なことで、ぜひそこにも知恵を上手に出し合っていただきたいと思っています。

○**結城**：3人の方々のお話からは、ある一つの構図が見えてきたような気がします。どんなにサークルが一生懸命働きかけても、行政がどんなにプログラムを用意しても、その核である親自体がしっかりしていなければいけない。常に自分に問いかけ、自分自身を見つめる作業ができていれば、サークルも行政の支援も活性化する一つの基盤になるのではないか。自分自身の問題点を掘り起こし、サークルの中で意見交換することでよりいいものが探せるであろうし、結果として自分の育自につながっていくということではないかということだったと思います。

そういう中で一人ひとりがサークルと相互作用しながら子育てのあり方を充実させていくことになるわけですが、サークル活動と行政がうまくタイアップできたときに、一人ひとりが持つ子育て支援への要請がうまく行政に発信できるであろう。また行政もそういうものを直に聞き、それを掘り起こす姿勢が求められる。そのために財政や場所の確保も重要であるし、できるだけ目立たない育児サークル支援とはどういうものなのかが模索される必要があるだろうという話が出てきたと思います。

ここで、たくさんいただいた質問票をいくつかの論点に整理しながらお話を伺ってみたいと思います。まず行政からの支援というものは、目立たない支援でやっていけるのか。その一方で子育て支援士育成や子育て仲間づくり育成というプログラムを検討して、積極的に支援をしていく方法も残されていると思います。汐見先生が検討されているプログラムを具体的に紹介していただき、また行政の方からもコメントをいただきたいですし、鈴木さんからは行政でやることかサークルでできることかといった部分を吟味していただければと思います。

○**汐見**：育児支援士などという名称を使ったのですけれども、そういう名前がいいかどうかはこれからみんなで議論しあっていただきたいと思います。子育てがうまくできない悩みを心理的なカウンセリングで解決できる部分というのは限られています。家庭というものがうまく機能するように、第三者がソーシャルワーク的に支えてサポートしていく社会をうまくつくっていけないかということを考えていまして、ですからファミリー・ソーシャルワーカーといってもいいわけです。単にカウンセリングではなく、実際にその人とつきあいながらソーシャルワークとしてやらなければいけないということがあるわけです。

私はそういう一環として育児支援のことを考えています。あれこれ模索中で、例えば次の朝日カルチャーセンターの4月からの8回プログラムは、ファミリー・ソーシャルワークの理念、世界の関連する動き、3歳児神話や父親の役割、育児を支援するとはどういうことか、といった内容でやりますが、先々は、例えば子どもの育ちについての最新の理論、母子関係、父子関係の発達論、基本的な小児医学的な知識、現代家族論、現代の子どもの育ちの課題、絵本やおもちゃ論などといった内容で、回数も20～30回にして専門性を要求したいと考えています。今のところは、どういう可能性があるかを手探りでやっている段階ですので、まだ十分固まっていません。

○**結城**：今、お話を伺っているとファミリー・ソーシャルワークという本当に新しい領域から家族間の関係性といった問題にアプローチするものかと思われます。中野区でのプログラムはそういう関係性に加えて活動内容も含まれていたかと思います。

○**田嶋**：汐見先生のおっしゃるプログラムの内容は支援をしていく人を対象とし、中野のおひさまCoCoは、一緒に子育てをしている方たちの中から出てくる核になる方を対象としています。ですから、外側から支援をするのではなくて、自分たちが子育てをするときにどうやったら楽しくできるか、同じような立場の方たちの中から声掛けをする人を育てたいというのが目的なのです。当然プログラムの内容も、声掛けのしかたということです。ゲームをする中から自分という人間に気付く、「そういう役割も果たそうと思えば果たせるじゃない」「そんなに自分の中にこもらなくても、もっとフランクにつきあってみたら？」というきっかけをつくるのが私どもの講座のメインで、それのひっぱり出しをしてくれる先生にたまたま巡りあったということではないかと思います。

○**結城**：今回、配布いただいた「子ども夢未来フェスティバル」というプログラムを見ますと、鈴木さんの方でもいろいろな角度からプログラムを構成されています。これは行政の方々と一緒におつくりになったものですか。

○**鈴木**：3月の10、11日のうち10日の方はその会場でもある埼玉県県民活動総合センターの方で組まれたもの、11日の中の子育てテーマルームの部分を「彩の子ネット」で組んでいます。今回は中学生、高校生ぐらいまでを視野に入れようということで、不登校問題や障害児問題など、いろいろな角度から取り組んでいます。

子育てサロンはカウンセリングではないのだと、その人の心の奥深くに届かないと人は動かないのだということを思います。それは勉強をするということではなくて、何か気がついていくというところで、そこでまわりに仲間がいてくれると本当に心強いと思います。やはり子育てサロンでできてくる仲間というのは、そこを支え合える関係になりやすいです。

県内でも、そこから始まってさらに育児サークルの方たちにも届けようという動きをしはじめているところもあります。人の気持ちにまで触れることをやっていくかどうかが核になると思うのですけれども、そこからネットワークに発展していく可能性もあると思います。ただの育児サークルだけではなく、一生をとおした中でのコミュニティづくりに発展して、介護問題なども視野に入ってきますし、子どもも親も全部担っている女性というのはいったいいつ自分らしくいるのだろうかなど、いろいろなことを思ってしまいます。

○**結城**：それぞれに目的と立場が違いますので、そのプログラムの内容も変わってきますけれども、その関係性というものをどう考えていくか。それを心の問題、コミュニケーションの問題とどうつなげていくかということも重要なプログラムの内容であるということは共通しているのではないかと思います。

そのサークルの中の関係性ということでは横並びの関係の重要性をそれぞれ指摘されましたが、サークルがネットワーク化したり人数が増えてくると、どうしてもある種の役割分担や組織化というものが必要になってきます。その調整についてそれぞれのお立場から助言をいただけるとしたら、一言どういうコメントになるのでしょうか。

○**汐見**：私としては、自然でいいのではないかという感じがあります。田嶋さんがやっておられた自分をもう一度見つめ直してみるようなセッションでの気付きがあって、では、一回そういうことでやってみようかということでいいような気がします。あまり無理をせず、まず自分が出せる環境を上手につくったうえで、自然とそういう役割ができていくということでいいのではないでしょうか。

○**田嶋**：先生のおっしゃるとおりで、特に私などは行政の立場なのでこうあるべきだということは全く言えません。行政側からすれば代表（窓口になってくれる人）は欲しいのですが、それはこちらの勝手であって、活動している方たちの中に別にトップに立つ方がいる必要もないのかなと思います。たまたま面倒みがいいから前に立っていらっしゃる方もいるだろうし、人数が増えてしまったから自分たちで役割を決めなくてはいけないと思ったかもしれない。ただ、自分たちの活動を進めるためなら、自然にできていくのではないかという気がします。

○**鈴木**：私の方はリーダーみたいなことをしていますから、例えば従来型の組織の中で女の人がリーダーをしていると選挙に活用されてしまいがちな恐れは感じます。やはりネットワークの中で、みんなの意見の代弁者ということでいいのではないかと思います。

「3801人の子育て"実感"のアンケート」の一番最後のページに「彩の子ニュースレター」の号外をつけていますが、県の方で虐待に関する緊急会議があり、私たちのメンバーがここで母親の声を届けてきました。やはり子育てしている人から聞くというところから始めてくださると本当にいいと思います。

○**結城**：今日、お話しいただいた中で出てきたのは、親が核になってサークルと行政とがどういう相互作用をしていったらいいのか。サークルができるのは一人一人の親からじかに吸い上げた声を社会に投げかけていくことで、行政はそれを基盤にして、ときにはプログラムづくりなどで表に立ち、ときには自然な契機づくりとしていろいろな場を活用して自然に親がともに手を携えて子育てをしていけるようにする。その結果として、親も子どももそれぞれが子育てというサークルの中で育っていく。そういう関係がつくれていくのではないかということでした。その中で具体的にプログラムのつくり方やリーダーのあり方といった議論が出てきたと思います。

この場には各自治体の方、サークル活動をされている方、これから母親や父親になる方、いろいろいらっしゃるでしょうが、それぞれに今日のお話の中でいろいろな示唆を受けられたのではないかと思います。今日はご協力ありがとうございました。